

## 最優秀賞（テレビ神奈川社長賞）

お兄さん手伝って

秦野市立鶴巻中学校 二年 安田洸志朗

私の学校では中一の総合学習で職場体験があり、私はあるスーパーに派遣された。そこで商品陳列、バックヤードでの作業、お客様のお手伝いなど色々な経験をした。その時、一人のおばあさんに出会った。品出しをしていた私に「そこにいる学生さん、手伝ってくれない？」おばあさんが声をかけてきた。「買い物をメモしてきたんだけど、どこに何があるか分からなくて。」と言い、困っているように見えた。持病で歩きすぎると腰が痛むとも言っていた。

スーパーは一つのお店で多種多様な商品があるので、自家用車のない高齢者にとってはあちらこちらに行かなくても済むというメリットがある。しかしおばあさんのように商品が多すぎて目的のものが見つからない、英語やカタカナ表記が多くて中身が分からない、商品の位置が高くて手に取れないなど、どちらかと言うと若者には利便性が高いことが、高齢者にとってはデメリットになっていることが少なくないのが現実だ。先ほどのおばあさんも気になり手に取った商品の説明書の文字が小さすぎて読めないため、私が読むことで納得し、「いつもあなたのような店員さんがいてくれると私も助かるし、買い物がもっと楽しくなるわ。」と笑顔で帰られた。私は驚いた。品物一つ買うだけでこんなにも苦労している高齢者がいるなんて。我々にとっては欲しいものが手にできるスーパーが高齢者にとっては品物一つ買うのに苦労している現状がある。

では社会的弱者といわれる高齢者にとって優しいスーパー、商店とはどのようなものであろうか。

私が知っている八百屋さんは高齢のおカミさんが家族と経営しているのだが、他の商店には見られないサービスがある。三千円以上の買い物で無料配達、時には配達コースに近い高齢者自身を送迎することもある。野菜は物によっては数人で小分けにできたり、すいかなどは最小八分の一販売もある。時には提供品のヨーグルトを配っていたりもする。高齢なおカミさんだからこそ自身の発案だったり、お友達の高齢者の生の声を生かしているのである。

そういえばその店は外国人の姿も多く見かける。マンゴスチン、スターフルーツ、ライチ、パッションフルーツなど珍しい南国の果物のおいしい食べ方、食べごろの見分け方を東南アジアの方々に尋ねたり、顔見知りの留学生には同じ野菜の和食の食べ方、作り方を教えていたりする。高齢者に優しい商店は誰にでも利用しやすいことの表れなのだろうか、いつも様々な人でにぎわっている。

まずは社会的弱者が何をどう困っているのか、生の声を聞き、実態を知ることから始め、前出のおばあさんのような生の声を社会が拾い上げ、何を具体的に改善すべきかである。そうすることにより今後の超高齢化社会は住みやすいものにできるのではないか。そしてそれは社会的弱者や外国人にとっても優しい社会につながっていくのではないか。

これを機会に今後は自身も高齢者目線に立った物の見方、とらえ方をするように心掛けたい。例えばスーパーや商店で困っている人はいないか、券売機の買い方やチャージの仕方、乗り換え案内などできることはお手伝いしよう。願わくば世の中の全ての人が高齢者目線に立った物の見方、とらえ方をできるようにして欲しい。